

障害者と「アート」

共生社会とはだれもが認め合い支えあう社会のことだと認識している。しかし、実際には縁もゆかりもない人を簡単に認めたり支えることはしない。人と人の中には協働するテーマが必要なのだ。そんな中で、「アート（芸術）」は様々な人を結びつけ、突き動かす潜在能力が高いと感じている。なぜなら、絵画や造形、写真など「アート（芸術）」と呼ばれる活動は無数にあり、それらはボーダレスにつながり、どんどん広がっている。また、学校教育などを通じ、誰もが何らかのアート体験を経験したことがあるだろう。つまりアートとは身近な所為であり、あらゆる人が共有・共感できる活動なのだ。

だからこそ、「障害者作品展」などと表されているのを目にすると、違和感を感じざるを得ない。「なぜ障害者という属性でひとくくりにするのか」純粋に作品の価値を見出して展示するならば、作者に障害があることは重要ではないはずなのにと。絵本作家の田島征三さんのことばで「知的障害のある人だけとか精神障害のある人だけの展覧会は、胃病の人だけとか、いぼ痔の人だけの展覧会と同じくらい変なことだ！」というのを本で読んだとき、全くそうだなと思った。そもそも、日本におけるアウトサイダーアーティスト^{※①}の存在は医療や教育・福祉の中で発見され紹介されてきた経緯がある。そのため、作品自体の評価よりも、そのヒューマンストーリーに関心が行きがちであったと言われている。山下清さんはその典型的な存在と言えるだろう。一方、西欧では美術関係者による収集が主流であり作品そのものが評価されているという。このことは、今年の春「アールブリュット・ジャポネ展」^{※②}の凱旋展を観たときに実感した。作品の価値評価がされたうえで作者の作品を生み出す背景も紹介されており、プロモーションに長けていると感じた。

しかし、それでもなお、正式な美術教育を受けた者とそうでない者を分けることに疑問を感じる。アートの鑑賞には様々な方法がありアウトサイダーアートも一つの観点であるが、本来は先入観を持たず作品自体を鑑賞・評価すべきだと思う。そうでなければ優れた才能もアウトサイダーアートの枠内にとどめてしまうことになるのではないかと思うからだ。多様な表現機会を広め深めつつ、作者の属性によらずに評価するアート環境の整備を目指すべきではないだろうか。滋賀県近江八幡市のボーダレスアートミュージアム「N O-M A」はアウトサイダーアーティストの発掘・紹介、作品の記録・公開を行っている。一方で、正式な美術教育を受けたり、あるいはそれを生業とする、いわゆるインサイダーアーティストとのコラボレーション展も企画している。このような試みを含め、様々なボーダレスアートスペースやアートのコミュニティーの広がり期待したい。

※①子どもや、正式な美術教育を受けずに発表する当てもないまま独自に作品を制作しつづけている者

※②「ART BRUT JAPONAIS（アール・ブリュット・ジャポネ）展」2010年3月から2011年1月まで、パリ市立アル・サン・ピエール美術館にて開催された。日本全国から参加した63人の作家による約800点の作品を展示したこの展覧会は、パリで好評を博しました。

「アール・ブリュット」＝「生(き)の芸術」「生(なま)の芸術」

所員 降旗 守（ディセンターウィズ）